

研究主題

英語活動におけるジェスチャーの教育効果

大槻 雅俊

研究の概要

1. 研究の動機と目的

平成23年度から実施される小学校の外国語活動（以下、英語活動と表記）はコミュニケーションの素地作りが目標である。教育現場ではもうすでに準備が整っている学校もあれば、これからの学校もある。大多数はこれからのところがおおいのではないだろうか。21年から移行期間に英語活動に着手していなければならないのであるが、実際は学校によって温度差があるように思われる。

小学校の英語活動は、間違ってもよいし、単語のみでもよいと考える。この方が、子どもの精神的な負担が少なくなり、英語活動に楽しく参加できるように思われる。英語活動は、子どもが、発話することや聞くことの楽しさを味わい、自ら話そうとする意欲を高めることが重要であると考えます。

小学校学習指導要領の外国語活動の解説編には、音声によるコミュニケーションのほかに、ジェスチャーや表情がコミュニケーションを支えるものとしている。

言語以外のコミュニケーションの手段であるジェスチャーは、「英語ノート1」に7種類が提示されている。しかし、先に述べたように、実際の授業場面で、ジェスチャーを活用することによる教育効果については現在のところ明らかにされていないようである。ジェスチャーを活用することによる教育効果が明らかになれば、ジェスチャーを学習指導計画に積極的に位置づけ、英語活動のねらいに迫る有効な手立てになると考える。つまり、子どもが楽しく主体的に活動に取り組むことが期待できるのである。

研究の方法はジェスチャーを取り入れた授業のあとに、ジェスチャーに対する児童の意識を調査し、その結果の考察を通してジェスチャーの教育効果を探ってみることにした。

2. ジェスチャーの概観と教育現場におけるジェスチャーの活用例

コミュニケーションを図る上で伝達手段が必要である。伝達手段を大別すると、バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションに分けられる。バーバルコミュニケーションは、言語を用いてコミュニケーションをはかり、ノンバーバルコミュニケーションは非言語の手段を用いるコミュニケーションである。ノンバーバルの分類について、ナップ（Knapp1972）は、動作行動「ジェスチャー、身振り手振り、表情、目の動きなど」、身体特徴「体つき、体重、体臭、髪、皮膚の色など」、接触行動「打つ、あいさつ、抱く、なでるなど」、パラ言語「音声の高低やリズム、音声の強弱など」、近接学「対人距離や縄張りなど」、人口品「メガネやかつら、衣服など」、環境要因「照明、匂い、温度など」⁽¹⁾と示している。このようにジェスチャーはノンバーバルコミュニケーションの一つであり、動作で相手に意思を伝えることが目的のひとつである。

2. 1 ハンドサインとボディーサイン

小学校の低学年の児童の行動の特徴の一つに次のようなことがある。指導者の発問に対して、子どもが「はい、はい、はい、・・・」と言いつけるのである。また友だちが発言しているにもかかわらず、自分が言いたいと思った瞬間に発言している子どももいる。子どもの自発的な発言の素地を大切にすることは大切である。しかし、学級集団という社会のなかでは一定の話し方のルールが必要である。そのルールを身につけずに参加すると授業が成立しなくなるだけでなく、他の子どもの学習にも悪影響がでる。子どもが話し方のルールを身につけていればこのような事態は避けられるが、入学当初の子どもも多くは話し方のルールが身につけていないといつてよいだろう。そこで低学年児童への指導を徹底するためにハンドサインがよく活用される。ハンドサインの活用は学年が上がるにつれて使用頻度は低下するように思われる。

本稿では体をつかって意図を表現することをボディーサインと呼ぶことにする。水泳指導で多くの子どもに一齐に指示するとき、拡声器を使用する場合がある。指導者の声が子どもに届くという点では効果的であるが、聞いていない児童がいたり、近所から拡声器の音が大きくて苦情がでたりする。そこでプールサイドで、指導者がボディーサインを用いて指示を出し、これを子どもに注視させて行動に移させるのである。

3. 英語ノートに示されているジェスチャーの活用の留意点

学習指導要領の解説編にはジェスチャーについての配慮事項として「ウ 言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、ジェスチャーなどを取り上げ、その役割を理解させるようにすること」⁽²⁾とある。つまり、ジェスチャーを活用するねらいは、自分の思いを相手に正確に伝えることができるなど、言葉以外のコミュニケーションの役割をとらえさせることである。英語活動の初期の段階では、児童の英語の理解や運用が限定されているため、ジェスチャーの活用を通してコミュニケーションの楽しさを体験させることが指導のポイントである。⁽³⁾ また、ジェスチャーは同じ動作であっても地域によって異なる意味合いを持っている場合があり、同じ動作で意味合いの違いを比較することによって、多様なものの見方、考え方があることに気付かせるように配慮することとしている。⁽⁴⁾

英語ノート1にはOK. Oh! Good. Come here. Let me see. I don't know. Good luck! の7種類のジェスチャーが示されている。⁽⁵⁾

ジェスチャーの活用にあたって「誤解が起きないように、機会を得ては繰り返し指導し」⁽⁶⁾、言葉以外のコミュニケーションによる重要性に気付かせたいとしている。

ジェスチャーを活用する上での誤解がないようにとは、同じ意味を表す場合でも表す方法が地域によって違うものがあるからである。例えば、上の写真の「こっちへおいで」のジェスチャーはアメリカではその意味が通じるが、日本では犬を呼び寄せる時の動作に近いのである。日本では手のひらを下にむけて五指を上下に動かす動作が多く用いられる。アメリカとは手のひらの向きや動作が逆になるのである。

英語活動の学習では、英語を通して意思を表現することが重要である。そのなかでジェスチャーを活用する意義は、言語表現にジェスチャーを付け加え、より正しく、より豊かに相手に内容を伝えることにある。したがって、ジェスチャーはあくまでも言語表現の補完という立場にならざるを得ないだろう。ジェスチャーの活用にあたってはジェスチャーのみのコミュニケーションにならないように留意する必要がある。しかし、筆者は適切な表現が出てこない場合に限り、その代替の表現手段として活用することが重要であると考え。なぜなら、適当な英語表現ができなかった場合、会話が止まり、その時点でコミュニケーションが終了してしまうからである。

4. ジェスチャーを取り入れた実践事例と意識調査

単元名は「ジェスチャーをしよう」で2時間配当して授業を実施。目標は○表情やジェスチャーなどの言葉によらないコミュニケーションの大切さを知る。○表情やジェスチャーを付けて相手に感情や様子を積極的に伝える。○感情や様子を尋ねあう,である。(実践内容は略) このあと、意識調査を実施した。

4. 1 ジェスチャーに対する学習後の児童の意識

学習のジェスチャーに関する意識調査の結果

調査実施日：2010年6月

対象学年：第5学年 全57名

尺度：【1 はい 2 どちらかといえばはい 3 どちらかといえばいいえ 4 いいえ】

①ジェスチャーを使った英語活動は楽しかったですか。

問① 75 23 2 0 (%) N57

②ジェスチャーを使うのは楽しいですか。

問2 57 38 5 0 (%) N57

③会話をするとき,ジェスチャーを使おうと思いますか。

問③ 20 43 28 9 (%) N57

④ジェスチャーは,英語の会話で言葉に詰まったとき,助けになりますか。

問④ 66 28 2 4 (%) N57

⑤英語の活動に出てきたジェスチャーの意味が分かりましたか。

問⑤ 80 18 2 0 (%) N57

⑥ジェスチャーの動作は覚えやすいですか。

問⑥ 57 41 2 0 (%) N57

⑦ジェスチャーが入っている会話のほうに分かりやすいですか。

問⑦ 66 32 2 0 (%) N57

⑧ジェスチャーを使ったほうが話しやすいですか。

問⑧ 36 45 12 7 (%) N57

以上の結果から考察を行い、次のことが明らかとなった。

5. ジェスチャーの有効性

指導者がジェスチャーを活用して授業をすることは,子どもにとって興味・関心が高まる。したがって,ジェスチャーは,英語表現と併用することによって,子どもが楽しく,そして発話内容をよく理解することができる。また,子どもがとっさに単語を忘れのとき,代替の表現手段として活用することができる。このように,ジェスチャーは英語活動において,教育効果があると言える。

ジェスチャー活用の課題として,子どもがジェスチャーを使うことに抵抗があることである。それは,恥ずかしさや動作が分からないことなどである。「恥ずかしさ」を克服するには,ジェスチャーを使うことに慣れさせ,相手に自分の意思がうまく伝わるといふ満足感や安心感を感得させ,自信をもたせるようにすることとともに,受容的な人的環境をつくることが重要なことである。

まとめ

ジェスチャーの教育効果を調べるために英語の学習後の意識調査をもとに考察してきた。その結果、ジェスチャーを活用することによって、次の効果が期待できる。

- ・英語活動に対する子どもの興味・関心が高まり、学習が楽しくなる。
- ・英語表現の意味が子どもにとって分かりやすい。
- ・子どもは英語表現ができないとき、ジェスチャーの機能が別の伝達手段であるという認識をもっており、活用への期待がもてる。

以上のことから、ジェスチャーを交えた英語表現を活用することによって、伝達の内容をよく理解することができると言える。しかし、子どもたちはジェスチャーを取り入れた英語活動を、受け身的に取り入れているのである。それは先にも述べたが、恥ずかしさのあまりジェスチャーの行動がしにくいということである。つまり指導者のジェスチャーによって、学習の楽しさを味わっているのである。それは指導者の動作の面白さや、動作による意味の分かりやすさや、覚えやすさである。

ジェスチャーの導入にあたっては、先に述べた教育効果を目指すだけでは不十分であろう。子どもが言語以外の伝達方法としてジェスチャーを主体的に活用しながら、自ら発信する力を身に付けることが重要である。このことが、コミュニケーションができる力を高めることに繋がるのである。

【注】

- (1) Knapp, M.L. 1972 牧野成一他訳 『人間関係における非言語情報伝達』 1979 東海大学出版会
- (2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 東洋館出版 平成20年 p19
- (3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 東洋館出版 平成20年 p20
- (4) 同上 p20
- (5) 文部科学省『英語ノート1』 教育出版 平成21年4月
- (6) 文部科学省『英語ノート1 指導資料』 平成21年3月 p23